覇者の戦塵1944

サイパン邀撃戦 下

谷 甲州
Koshu Tani

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

●頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の→キーを押して下さい。
もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。

●画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみて下さい。

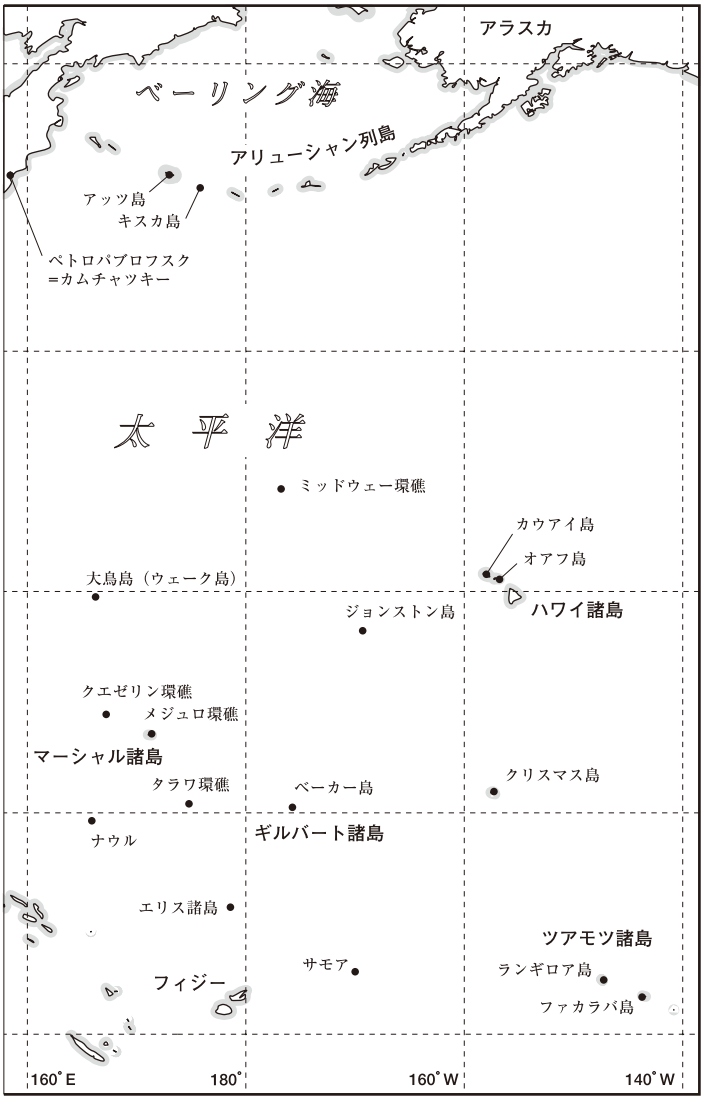
●本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

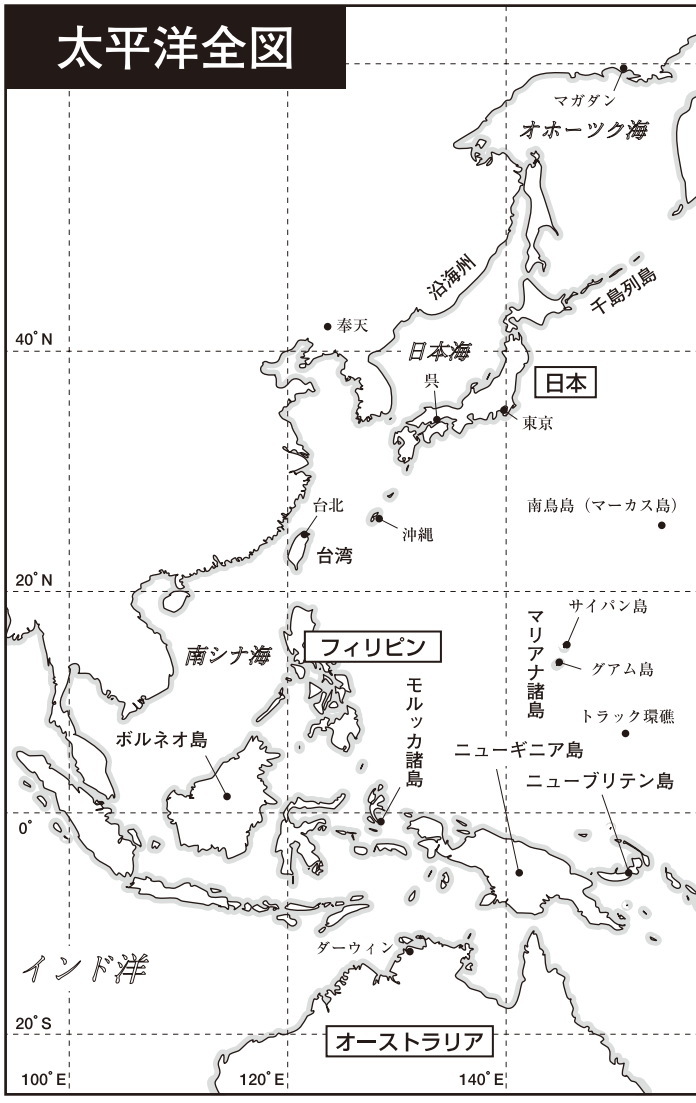
挿画　佐藤道明
地図　らいとすたっふ

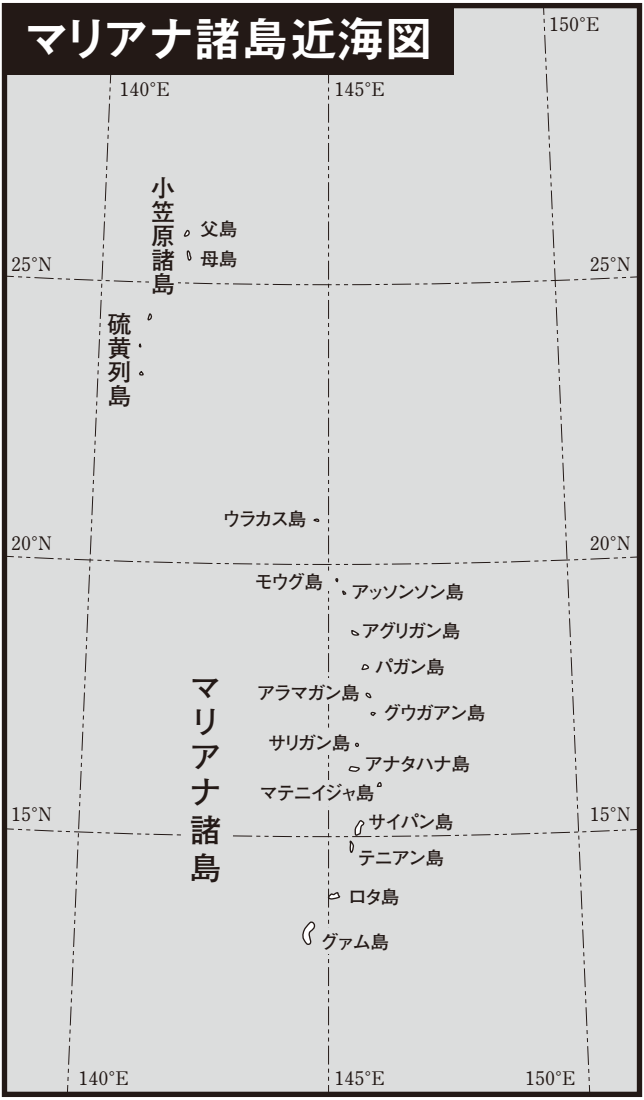
覇者の戦塵１９４４　サイパン邀撃戦　下　目次

転　章　持久戦（承前）　12
第一章　秘匿基地　25
第二章　戦車第九連隊　65
第三章　総攻撃　91

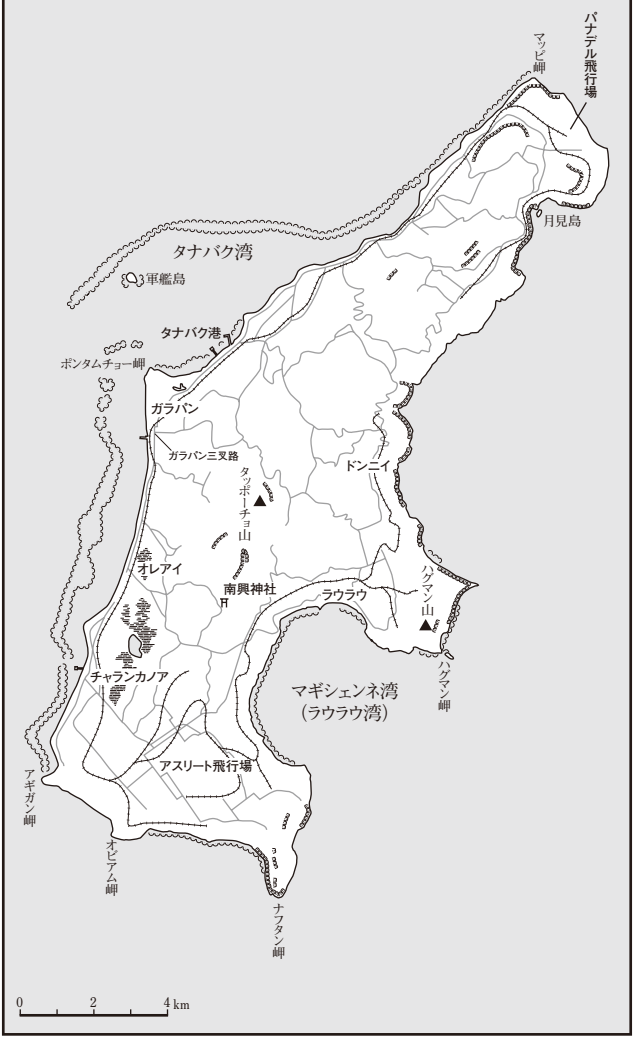
第四章　機動防御　124
第五章　テニアン空襲　162
終　章　混沌　203
あとがき　219


アラスカ
ベーリング海
アリューシャン列島
アッツ島
キスカ島
ペトロパブロフスク
=カムチャツキー
太　平　洋
ミッドウェー環礁
カウアイ島
オアフ島
大鳥島（ウェーク島）
ハワイ諸島
ジョンストン島
クエゼリン環礁
メジュロ環礁
マーシャル諸島
タラワ環礁
ベーカー島
クリスマス島
ナウル
ギルバート諸島
エリス諸島
ツアモツ諸島
サモア
ランギロア島
フィジー
ファカラバ島
160°E
180°
160°W
140°W


太平洋全図
マガダン
オホーツク海
沿海州
千島列島
奉天
日本海
日本
呉
東京
40°N
台北
沖縄
台湾
南鳥島（マーカス島）
20°N
サイパン島
マリアナ諸島
グアム島
南シナ海
フィリピン
モルッカ諸島
トラック環礁
ボルネオ島
ニューギニア島
ニューブリテン島
0°
ダーウィン
インド洋
20°S
オーストラリア
100°E
120°E
140°E


マリアナ諸島近海図
150°E
140°E
145°E
小笠原諸島
父島
母島
25°N
25°N
硫黄列島
ウラカス島
20°N
20°N
モウグ島
アッソンソン島
アグリガン島
パガン島
アラマガン島
グウガアン島
マリアナ諸島
サリガン島
アナタハナ島
マテニイジャ島
15°N
15°N
サイパン島
テニアン島
ロタ島
グァム島
140°E
145°E
150°E

サイパン島詳細図


マッピ岬
バナデル飛行場
月見島
タナパク湾
軍艦島
タナパク港
ポンタムチョー岬
ガラパン
ガラパン三叉路
タッポーチョ山
ドンニイ
オレアイ
南興神社
ラウラウ
ハゲマン山
ハゲマン岬
チャランカノア
マギシェンネ湾
(ラウラウ湾)
アスリート飛行場
アギガン岬
オビアム岬
ナフタン岬
0
2
4 km

覇者の戦塵１９４４　サイパン邀撃戦　下

転章　持久戦（承前）

浮上しつつあることは、艦内にいてもわかった。

最初は艦橋の頂部だった。海面を割って突出する気配が、波の音とともに伝わってきた。すぐに艦橋全体が、海水の流れる音でつつまれた。音源の位置は急速に近づいてくる。次は甲板全体が波で洗われるのかと思ったが、予想ははずれた。

遠く離れた艦首のあたりで、ふいに水の流れる音がした。押しあげられた大量の海水が、舷側を流れ落ちているらしい。艦はわずかに後傾した状態で、浮上したようだ。大きく動揺をくり返しながら、次第に体勢を安定させていく。

そのことに室尾技師は、ほんの少し違和感をおぼえた。普段とは浮上時の手順が、ことなっているようだ。ただし確信は持てない。

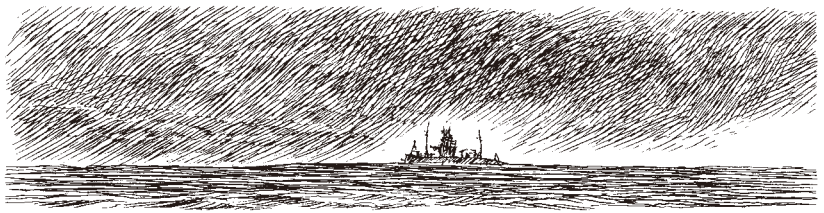
単なる勘違いなのかもしれなかった。この型の潜水艦に便乗するのは、はじめてだった。そのせいか、勝手のわからないことが多くて戸惑った。

艦が浮上したのは間違いなさそうだ。すでに波の音は、後甲板にまで広がっていた。潜望鏡深度で安全を確認したあと、一気に浮上したのかと室尾技師は見当をつけた。違和感が生じたとすれば、それが原因ではないか。

通常はメインタンク内の海水が排出されてから浮上の完了まで、もう少し時間がかかっていたように思う。艦体を傾斜させたまま、浮上することもなかった。よくわからないが、今回の浮上は変則的な手順でおこなわれたようだ。

――敵の対潜部隊が、周辺海域で行動しているのか。

状況が把握できないまま、そんなことを考えた。不安を感じさせる状況だが、浮上航行への移行に停滞はなかった。すぐにエンジンが始動された。騒々しい始動音を残して、ディーゼル主機が回転をはじめている。



艦橋では見張り要員が配置についたようだ。いくつもの足音が、重なりあって響いた。その動きからして、間近に敵がいるとは思えなかった。室尾技師は愁眉（しゅうび）を開いた。この分なら、あわただしく潜没することはなさそうだ。

浮上した伊号第三六一潜水艦は、白波を蹴立てて水上航行をはじめている。海上の波は高そうだった。浮上した直後から、艦は不規則に揺れ動いている。速度をあげるにつれて、艦の動揺がさらに激しくなった。

それでも、速度が低下しそうな兆候はなかった。押しよせてくるうねりを、たたき伏せるようにして航進しているのだろう。それとともに、室尾技師のいる区画に外気が吹きこんできた。

たっぷりと酸素をふくんだ新鮮な空気だった。うなりを生じて、流入してくる。場違いな印象さえ受けるが、潮風をさえぎるものはなかった。隣接する区画との間に設けられた水密扉は、すべて開放されている。

無意識のうちに、室尾技師は深呼吸をしていた。機械油とディー

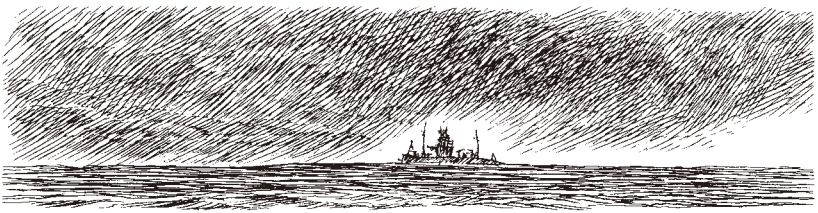
ゼル燃料の入りまじった艦内の臭気には、いまだに慣れることがなかった。その上に潜航中の気温と気圧の上昇は、耐えがたいほどだ。

最初のうちは流れ落ちる汗に閉口したが、すぐに発汗は停止した。高温多湿に慣れたというより、汗が流れつくしてしまったらしい。艦内の環境は劣悪だった。場数を踏んだ乗員たちでさえ、脱水症状で昏倒することがあるという。

そんな状況だから、浮上中に流入する外気だけが唯一の楽しみだった。できることなら艦橋に立って、外気を直に吸いこみたいところだ。だが、それを口にするのは憚（はばか）られた。室尾技師は空技廠（航空技術廠）から派遣された技師で、この艦の乗員ではない。

積荷の管理と調整のために同乗しているが、作業自体は拍子抜けするほど簡単なものだった。緊張していたのは最初のうちだけで、航海の大部分は暇を持てあますことになった。他の乗員たちを差しおいて、艦橋で息抜きをさせろなどといえる状況ではない。

しかも伊三六一潜が航行しているのは、敵潜や哨戒機が出没する危険な海域だった。艦に慣れない便乗者が艦橋にいたのでは、緊急



事態の対応が遅れる可能性があった。最悪の場合は艦外に取り残されて、溺死するかもしれない。

そのため航海の間は、艦内でじっとしているしかなかった。だがそれも、今日で一段落する。夜半すぎには前線の日本軍部隊と邂逅して、補給物資を届ける予定だった。何ごともなければ、今夜のうちに積荷を残らず揚陸できる。

あとは国内の母港に帰投するだけだ。一日ごとに内地が近づき、敵と遭遇する可能性は低くなる。軽巡洋艦「大井」からはじまった今回の出張は、予想外の出来事が次々に起きた。危機的な状況にも遭遇したが、なんとか無事に終わりそうだった。

無論、懸念材料はあった。海がかなり荒れているのか、伊三六一潜はたえまなく動揺している。気のせいか浮上の直後よりも、うねりが大きくなったようだ。大きな振幅で、不規則に揺さぶられている。

ときおりうねりに突っこんで、大量の波飛沫をはね上げているようだ。艦首のあたりから、衝突音と激しい水音が伝わってくる。は

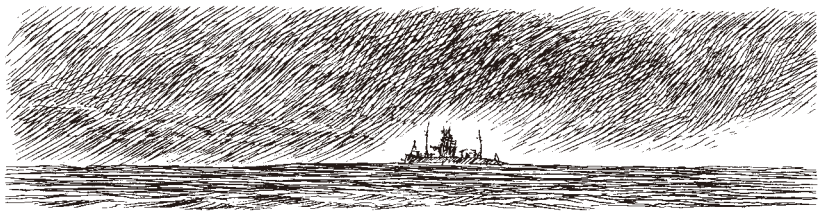
ね上げられた海水は、艦橋付近にまで飛ばされてくるようだ。艦橋に配置された見張り要員は、苦労しているのではないか。

室尾技師にとっては、気がかりな状況だった。このまま状況が好転しなければ、物資の移送作業は延期するしかなかった。海況が落ちつくまで、待機をつづけることになる。今夜中に天候が安定しなければ、明日の日没を待って作業を開始するしかない。

それまでは有力な敵部隊が出没する海域で、息を殺して待ちつづけることになる。考えるだけで気の重くなる話だが、室尾技師にできることは何もなかった。艦長以下の乗員を信じて、作業が完了するのを待つだけだ。

名前を呼ばれたのは、夜半に近い時刻だった。艦首側の区画から、伝令の兵が顔を突きだしている。室尾技師が応じると、ただちに艦橋までくるよう伝えた。補給物資の引き渡しが開始されるから、作業に立ちあってほしいといっている。

室尾技師は戸惑った。意外さを感じて、すぐには返答できなかったのだ。補給物資の揚陸が、今夜おこなわれることは知っていた。



だが作業に立ちあうというのは、はじめて聞く話だった。室尾技師に求められているのは、輸送中の安全管理だけだと聞かされていた。

事情はわからないが、応じる以外になさそうだ。もともと曖昧なところの多い出張だった。パラオの泊地で大井を退艦して、内地にむかう便を待っている時だった。翔竜を輸送中の潜水艦に同乗して、技術指導をおこなうよう命じられた。

といっても、大井の時ほど困難な仕事ではなかった。伊三六一潜には翔竜が積みこまれているが、洋上で射出する能力はない。孤立した彩帆（サイパン）島の守備隊に、補給物資として輸送するだけだ。

ただし敵の制空権下で強行輸送するのだから、昼間はもとより夜間も潜航をしいられる可能性が高い。敵の対潜部隊による攻撃を、長時間にわたって受けるかもしれない。輸送する翔竜はいずれも旧型で、固体燃料を燃焼させて飛翔する構造になっている。

高温多湿の潜水艦内に、長時間にわたって収納するのは好ましくなかった。固体燃料が変質して、戦闘時に作動しないこともありうる。不発程度ならまだいいが、異常燃焼による迷走や自爆の可能性

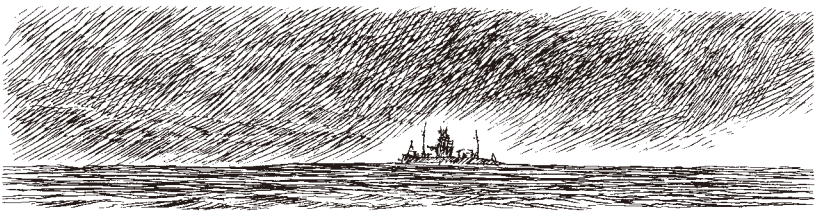
も考えられた。

さらに深刻なのは、輸送中の事故だった。艦内に積みこまれている翔竜が、自然発火する可能性もあるのだ。もしも艦内で火災が発生すれば、伊三六一潜は航行の自由を失う。最悪の場合は一人の生存者も残さず、消息をたつのではないか。

そのような事態を回避するために、空技廠から技術者が派遣されることになった。使用実績の少ない兵器だから、何が起こるのか見当もつかなかった。何も起こらない可能性もあるが、前例がないのだから正確に予測することは困難だった。

もしも異常事態におちいったら、技術者の判断で貨物庫への注水や翔竜の艦外投棄といった処置をとることになる。ところが出撃の直前になっても、同乗技術者の都合がつかなかった。新兵器である翔竜は初期不良が多く、その対策で忙殺されていたからだ。

予想外の不具合が頻発するものだから、内地における導入時の訓練だけでは対応しきれずにいた。多数の技術者が現地部隊に派遣されていたが、それだけで相当な人手が必要だった。そのため出張が



可能な技術者が払底し、伊三六一潜に人員を配置できなかったのだ。

苦肉の策として、伊三六一潜のパラオ寄港が決まった。水温の低い日本近海では艦内温度が上昇せず、技術者をはりつけておくまでもないと判断されたからだ。技術者による監視は、パラオ－サイパン間でのみ実施されることになる。

だが当事者である室尾技師には、寝耳に水の話だった。大井における業務を無事に終了して、内地への便を探していた矢先にサイパン行を命じられたのだ。そんな状態だから、事前の打ち合わせには充分な時間をかけられなかった。

具体的な業務内容に、食い違いが生じていたとしても不思議ではない。そう考えて待機している伝令に、了解の言葉を返した。航海中は何ごとも起こらず、平穏にすごすことができた。最後にひと仕事こなしたところで、負担にはならないだろう。

それはいいのだが、艦橋で何をするのか説明はなかった。だが、あまり深刻に考える必要はなさそうだ。単なる慰労と考えて、新鮮な外気に触れればいいのではないか。この機会を逃せば、艦橋に立

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はＰＤＦ形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。